



発表1. 14:00~15:30

市川彰 (日本学術振興会特別研究員PD / 国立民族学博物館外来研究員)

「メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する考古学的研究」

本研究では、メソアメリカ地域における先古典期から古典期にかけての変化をマクロな視点とミクロな視点から通時的にとらえ、いわゆる「古典期」とよばれる時期に興隆した各地域社会の形成過程について考察したい。

マクロな視点では、メソアメリカ各地（メキシコ中央高原、オアハカ地域、マヤ地域）における社会階層化の過程について着目し、墓への労働投下量という観点から各地域の社会階層化の過程およびその特質について比較検討する。ミクロな視点では、マヤ南東地域チャルチュエバ遺跡および周辺地域の発掘調査資料をもとに、先古典期から古典期にかけての社会変化に対する周縁地域の適応戦略について考察する。

【コメンテーター】青山和夫 (茨城大学人文学部教授)

発表2. 15:45~17:15

佐藤吉文 (南山大学人類学研究所非常勤研究員 / 国立民族学博物館外来研究員)

「ティワナクの存在論的理解はいかにして可能か？： ティティカカ湖盆地南西岸のパレルモ遺跡における ティワナク様式物質文化とその社会的位置づけ」

多様性を多様なまま理解しようとする近年の複雑社会論は、新進化主義にかわる人類史へのアプローチとしてティワナク社会の理解を豊かで複雑なものにしている。その一方で、新たな調査研究によって提示される膨大な量の考古学データを統一的に理解する視点の欠如によって、考古学者による資料理解はますます個別主義的陥穽に陥る危険にさらされているといえるのではないだろうか。

この陥穽を克服するには、「いつ」、「だれが」、「どのように」、「どんな」物質文化的環境のなかで特定文化に属する「もの」や要素を扱ったのかを明確化し、その社会的位置づけを丁寧に確かめていく必要がある。いわば、存在論である。本発表では、パレルモ遺跡出土資料を基礎に置きながら、存在論にもとづいたティワナク国家モデルの可能性について検討したい。

【コメンテーター】渡部森哉 (南山大学人文学部准教授)



古代アメリカ学会 第2回東日本部会研究懇談会 古代社会へのまなざし

2013年5月11日 (土) 14:00より 東京大学総合研究博物館 7階 ミュースホール